
もてる男の10の条件

なとりうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もてる男の10の条件

【Nコード】

N8357Q

【作者名】

なとりうむ

【あらすじ】

中学校に入学した主人公は、モてる男になる事を決意する。モてるためなら何でもやる、トラウマなんか怖くない！
あの手この手で自分を磨け！！

その1 愛されボーイ

俺は榊原 一馬。ゆるふわモテカワを目指すスピリチュアルボーイだ。

意味はよく分からないが、最近女性に人気がある言葉らしい。

スピリチュアル。語感が良いし、皆が知らなさそうな言葉というの
も良い。

中学生になった今は勉強が出来るというのも大事な要素だ。

しかし、モテる為にはなにより女子受けしないと駄目だ。

今女子の間ではゆるふわモテカワというのが流行っているらしい。

無駄に見てくれが良い姉の部屋に有った雑誌に書いていたんだ、間
違いないだろう。

決死の思いで侵入した成果があつたということだ。

散って行った戦友『英世』にもこれで顔向けが出来る。

だからお姉様、これ以上ハーゲンダッツは勘弁してください。

さて、どうすれば『ゆるふわモテカワ』になれるのだろうか。

英世二人分のハーゲンと引き換えに姉ちゃんから協力を得ることが
出来たわけだし、聞いてみることにしよう。

「それにはスイーツ（笑）になることね」

「すいーっ？」

半笑いの姉ちゃん曰（笑）を付けるのが作法らしい。

「スイーツ（笑）になればゆるふわになるわ」

「スイーツ（笑）て食べ物じゃねえの？」

「まじ一馬スイーツ（笑）」

意味がわからないけどなんか腹が立つ。

でも、今頼りになるのは姉ちゃんだけだ。

「まあ今すぐにスイーツ（笑）になるのは無理ね」

「そこをなんとか……！」

モテたいんです！

そしてあんなことやこんなことを……

「顔がキモい」

……はっ！

「ま、とりあえず見た目だけでもスイーツ（笑）にしてあげる」

「まじで？」

「本気と書いてlieよ」

「よくわからないけどカッケェ！」

今の俺には姉ちゃんが輝いて見える！

「このお姉様に任せなさい」

「ありがとう姉ちゃん、伊達に年増になってねえな！」

殴られた。何故だ。

あれから年増という言葉の意味を説明され謝罪の為に最後の英世が散った。

どうにか機嫌を直してくれた姉ちゃんは約束通りに俺をゆるふわもてかわな見た目に改造してくれた。

「姉ちゃん」

「いやー我ながら上出来だわ」

なんかふわふわした髪にびっくりするくらい白い肌。

めちゃくちゃくすぐったい上に恐い思いをした目元はぼっちりと開いてて微妙にキラキラしてる。

リップクリームすら塗った事がない唇は薄紅色に染まっていた。

「うーん、カワイイわ。あんたいっそ一子になれば？」

「うーひどいよ……」

顔だけなら良い。顔だけなら。

今俺はワンピースを着ている。しかも妹の。

姉ちゃんのスカートはでかった。そう言ったら殴られた。ひどい。

「元々中性的、というよりまだガキの顔してるからイケると思ったけど」

「うそだ！」

ラメの付いた俺の目元以上に眼を輝かせて、撫で回してくる姉ちゃん。

ピンポーン

インターフォンが鳴る。

嫌な予感も鳴る。姉ちゃんの顔がいじわるな笑顔に変わる。

「嘘だと思うなら！」

首を掴まれて玄関まで引きずられていく。

暴れても良いのだけど、今着てる空色のワンピースは妹の物だ。破れたりしたら……。

そもそも姉ちゃんから逃げられるわけがない。

「やつほ、雪。見せたい物ってなに？」

玄関先に立って居たのは姉ちゃんの友達っぽい人。

ジーンズに白のTシャツという男らしい格好。加えてさっぱりした短髪なのに、一目で女性とわかる。

姉ちゃんと比べると……

比べる物がなかった。

ゴン

「なくて悪かったわね」

「まだ何も言っていない！」

「まだ……？」

墓穴を掘りました。

「まあお仕置きは後にするとして……とりあえず入って。薫」

「お邪魔するよ」

薫と呼ばれた姉ちゃんの友達は凄く可愛いサンダルを脱いで家にある。

一瞬だけぶつかった視線はやたらと勝ち気に見えた。

ちよっと釣り眼ぎみなせいかもしれない。

ガチャ

パタン

カチリ

上から姉ちゃんの部屋が開く音。閉まる音。最後に鍵が閉まる音。
「この子どう思う？」

後ろ手に鍵まで閉めた体勢で、薫さん？ に問い掛ける姉ちゃん。
「可愛いね、これが妹さん？」

勝ち誇った様に見えたのは錯覚であって欲しい。

「ふふん」

錯覚であって欲しかった。

「弟よ！」

「うそ！？」

嘘であつたらどんなに良かったか！

や、妹でいたかったとかじゃなく。

「これはもはやおもうと言っていていいレベルでしょ？」

「この子が男の娘……」

薫さんが恐い。焦点が合っていない。嫌な予感しかない。

「薫、この部屋には私しかないわ」

意味が分からない。

困惑しっぱなしで一言も喋っていないけど俺もいるよ？

ガバツ！

「ひゃうっ！？」

「あー可愛いかわいいかわゆいー」

ぐりぐりくりくり

人形にするように容赦なく抱きしめてくる薫さん。

「柔らかいし良いニオイだしちっちゃいし」

「そうでしょうそうでしょう！」

「でも少年なのよね？」

「そうなのよそうなのよ！」

始めに感じた勝ち気な印象はどこへやら。

とろっとろになった目のまま撫でるわ嗅ぐわほお擦りするわ。

「あ、あの……」

「やーん声もかわいいー」

なんもいえねえ……

「現実こんな女装美少年がいるなんて……持って帰っていい？」
良い訳ねえだろ！

「良いわよ」

「姉ちゃん!？」

俺の意思……意志？ は無視ですか！

「まあ冗談はこれくらいにして、今日はこいつで遊びましょう」

「それも冗談だよね!？」

「本気と書いてtrueよ!」

さっきとなんか違うくない？

「ねー君、名前なんて言うのー?」

薫さんは薫さんで猫撫で声のマイペース。
印象って当てにならない。

「一子よ」

「一馬だよ!」

「一子ちゃんかー」

「一馬です!」

「じゃーかずちゃんだねー」

「やめてください」

聞いているの？ 聞いてないの？

「ねーかずじゃんー?」

うわ、悪化した。

「確かここに……あった。これつけて?」

なんかふりふりしたなにかにふわふわした何かが付いたもの。
それをタンスから取り出した薫さん。

ここ姉ちゃんの部屋だよね?

「イヌミミメイドのカチューシャとは……渋い選択するじゃない」
渋いの? これ渋いの?

「それと……これも」

「それは駄目！」

なんか肌色っぽい物が一瞬見えたけど……

「えーどうして？」

「や、ほらやっぱり膨らみがないからこそ男の娘というか……」
「なんだか知らないが、これ以上男の尊厳を奪われるのは堪らない。
逃げる。」

部屋の鍵なんて内側から普通に開く。

大事なのはタイミング。

「ふーん？ 恥ずかしいと」

「や、そんなことナイケド……」

「じゃあかずにゃんに付けてもいいじゃん」

「弟はいえ異性に普段自分が肌に付けるものを……」

「今はおもうと、男の娘でしょ！」

「そういう問題じゃないでしょ！」

今だ！

すかさず両手を床にたたき付け、反動で一気に立ち上がる。

一歩目の踏み込み。姉ちゃんと薫さんを避け体を沈ませる。

二歩目の蹴りだし。呆氣に取られる二人を尻目に体を扉へと跳ばす。

なんかすーすーする！

違和感を噛み殺し右手でドアノブを回し、引く。

勢いそのまま体を捻り、廊下へと踊り出る。

目の前には、眼を丸くした妹、雫が立っていた。

「へ」

「へ？」

「変態！！」

ドグ

お、う、あ、あ

急所への蹴りは鈍い音がしました。

その後はてんやわんや。

雫に泣かれ姉ちゃんに叩かれ兄ちゃんに笑われ薫さんに連れ去られかけた。

もう薫さんがどんな人なのかさっぱり分らない。

幸い両親にはバレなかったけど、俺の心は深い傷を負った。

でも、へこたれない！

俺はモテることを諦めない。

俺の戦いはまだまだこれからだ。

「一馬ー現像出来たよー」

「なんの？」

「ほら、可愛いでしょ」

「それこの前の！」

「なにになにどうしたの？」

「母さんはちょっとあっちに！」

「どうした？」

「父さんもこないで！ ああもう！ しょんぼりしないで！」

「あーあれか」

「兄ちゃんも笑ってないで助けてよ！」

「えいっ！」

「雫！？」

「「「あ」」」

「「ほほう」」」

ま、負けないもん！

その2 ダンディズム

俺は榊原 一馬。ゆるふわもてかわを目指す、クールあんどダンディボーイだ。

ダンディボーイは『ダ』にアクセントを付けて滑らかに、はい。ダンディボーイ！

ちよっと恥ずかしいが、これもモテるためだ。男には羞恥心など不要！

イケメンな兄貴の部屋にあった雑誌に書いてたんだから間違いないだろう。

ダンディボーイもその雑誌の受け売りだ。寡黙で渋い男、いや『漢』が様々な世代からモテるらしい。

様々な世代ということは中学男子である俺も例外じゃないだろう。ところで『漢』とはどう読むのだろう？

まあ、いい。この前はちよっと失敗したが、俺は叩かれて引き延ばされるタイプだ。

今度こそモテる『漢』になってみせる！
読み方は『かん』でいいのかな？

しかし、渋い男とはどういったものなのか。

今のままでは情報が少な過ぎる。

友達の拓也曰、情報を征するものが戦いを征するというらしい。今のままではにっちもさっちも行かない。

というわけで俺は再び兄貴の部屋に忍び込むことにする。

といっても姉ちゃんの部屋と違って鍵が掛かっているわけでもない
ので普通に入れる。

なんか扉に紙が挟まってるのが気になるけど、まあいいか。

俺と妹の部屋と違い、それなりに散らかっているが汚くはない。

彼女が、彼女がよく遊びに来るからだ！

俺もいつか兄貴の様にモテモテになると決意を新たに物色開始。本棚には漫画と小説が納められているが、順番がばらばらだ。お、この漫画最新巻買ってんだ。言ってくれりゃ良いのに。部屋の中を見回しても他に情報の元が見つからないので漫画を見ることにする。

漫画はバイブルだ！　と言ってる友達もいるし、参考になるだろう。バイブルがなにかはわからないけど。

最新巻を読む前に一つ前の巻を探す。

内容のおさらいをしてから読むのが俺のジャスティファイ！

意味は知らないけどカッコイイ……らしい。

けっこう離れた所にあった。

「ん？」

取り出してみても何か違和感。やたら本棚の奥が黒い。

確か木目だった筈だけど……。

両隣の名前も知らない小説を二、三冊ずつ抜いてみた。片側は木目が見えた。

どうやら奥に別の何かがあって、そのせいで黒く見えたらしい。

気になるので更に何冊か抜き出して、本体を取り出してみた。

こ、これはっ！？

EROHONではないか！？

沸騰した血液が体中を駆け巡り、全身がかつてないほどに緊張する。

大量の酸素が脳を刺激し、限界以上の思考能力を発揮。

極めて冷静。かつ、迅速。

自分が置かれた状況を把握し、今後の行動をシミュレート。

あらゆる可能性を考慮し、最適解をたたき出す。

この間僅か一分にも満たない。

「よしっ」

これから俺が取るべき行動。

『その場でページをめくり、脳に全てを刻み込む』

各ページに割ける時間は長くとも一秒。

が、下手に持ち出すのは危ない。これがベストとみた！

極限まで集中した世界で、しなやかに指を躍らせページをめくる。飛び込んでくる裸体が余す事なく心に刻まれる。

問題があるとすれば、それが正しい男のモノであるということだ。

「かはっ！」

うぎゃあああああ！

「目がーっ、めえええええがああああっ！！」

浅黒い肌に輝く汗。盛り上がった筋肉。特に正しい胸板が記憶の奥底に入り込む。

おっぱいなんだから仕方ないじゃないか！

太陽のような笑顔に馬鹿にされている気分だ。

これは忘れたくても忘れられそうにない。

いつそトラウマ。

最高に決まったポーズがグルグルと頭の中で暴れ回る。

やばい、吐きそう。

反射的に閉じた目を開き、改めて筋肉と向き合う。

記憶されたのが胸板でよかったのかもしれない。

奴は下も穿いてなかった。しかも全力だった。

こっちだったら本気で吐いていた気がする。

「兄ちゃんエ……」

「呼んだか？」

背後からの声。

「……いつから？」

「目がー目がーから」

「そんな生易しいもんじゃない！！」

あの衝撃は良くなり悪くて人生初だ！

一人大笑いする兄ちゃんに対し無然とした俺。

いや、確かに悪いのは忍び込んだ俺だけど……。

「しかし、兄ちゃんにあんな趣味があったとは……」

「いやいやねーよ。あれはお前用の罠だ」

なんだって！

「どういことだ兄ちゃん」

「ふ……。この前姉貴の部屋で色々あったろ？ 一馬は単純だから次は俺の部屋だと思ってな」

むー。全くもってその通りだから何も言い返せない。

突っ込みどころは説明口調がわざとらしいということくらいだ。

「で、お前の行動を予想した」

「そして見事に引っ掛かったと」

その通りと笑う兄貴が憎い。だって男の俺から見てもカッコイイんだもん。

「いや、楽しませてもらったよ」

「俺は全然楽しくない！」

それどころかトラウマが出来たわ。

仕方ないと言呟き、兄貴は切り出す。

「お前、ダンディになりたいんだろ？」

「何故それを」

「いや、解りやすく雑誌置いてたから読んだだろ？」

そこから計算済みですか。そんなに俺はわかりやすいですか。

「で、手っ取り早くダンディになる方法があるぞ」

「まじでっ!？」

「本気と書いてlaughだ」

これ流行ってるのかな。意味が分からないけど。

「零夜兄ちゃん……」

何処のNo.1ホストだよって名前と顔だけど、最高の兄ちゃん……？

「実はその本なんだが、俺の友達のものだな」

兄貴の指は例の筋肉へと向けられている。

「で、そいつはこういうものも大好きなんだ」

取り出されたのは新たな本。

表紙に踊る『男の娘』とか『女装美少年』『〇にゃん』とかとか。

嫌な予感が雷鳴の如く駆け巡る。

姉ちゃんに色々やられた記憶が……

「今日遊びに来るから、挨拶しろよ」

パ、バンッ！

俺は今、光だ。

思考より早く跳び上がり、兄貴の笑い声すら届かない速さで走る。

「いいいいいいやああああああっ！！」

尾を引く自分の声だけ延々と延びていった。

それからの記憶は酷く曖昧だ。

兄貴の笑い声を振り切り、気付けば徒歩30分程の中学校までノンストップで来ていた。

生理的な危機が様々なリミッターを外したらしい。

この短い間に深すぎる傷を負った心が挫折しそうになる。

が、俺はまだまだ倒れちゃいない！

学校に逃げて来たのが良かった。

目標達成まで、俺の戦いはまだまだ続く！

「おーい一馬ー」

「兄ちゃん……」

「そう構えるなって」

「いや、無理だろ」

「まあまあ、この前の詫びだ」

「なにこの本」

「流石に禁なエチィのは駄目だからグラビアだ」

「兄ちゃん……！」

「雫にはれないようにな」

「わたしがどうかした？」

「「な、なんでもないぞ！」」

「？」

兄貴はセンスも最高だ！

その3 ありのままで

俺は榊原 一馬。ゆるふわモテカワをクールに目指す、等身大の自分らしい男だ。

等身大の自分らしく、無理な英語は使わない。

自分が出れることをありのまま、出来るかぎりを行う。それが、等身大でしょう？

子供の目から見ても綺麗な母さんが仕切ってるリビングにあった雑誌に書いていたんだ、間違いないだろう。

……間違いないのだろうか。俺には良く分からない。

っーわけで。

「母さん」

「なーにー？」

直接聞いてることにする。

「この雑誌にある『等身大の自分』てなにさ？」

「さあー？ なんででしょうねー」

「母さんもわからないの？」

「だって『自分』だから、母さんは母さんの事しかわからないわー」
なんのこっちゃ。

「一馬には一馬の、お母さんにはお母さんの『自分』があるの。」

だから一馬の『等身大の自分』はお母さんにはわからないわ
ふーむ。

「自分の事は自分しかわからないか」

「そうだねー」

母親の言葉は深い。らしい。

意味を咀嚼し飲み下そうと反芻してみるが、完全に理解出来た自信がない。

しばらく唸っていると、母さんからありがたい言葉をいただけた。

「一馬」

「なに？」

「実はさっきの言葉、その場で考えたから適当なのよー」

「……え？」

「意味なんてないんだよー」

……なんてお茶目な人だ。

「なるほど、これが年の功か……」

ぶっ叩かれた。笑顔で。

最近女性によく叩かれるなあ……。

叩かれはしたが『等身大の自分』の謎は解けないままだ。

しかし転んでもタダじゃ起きないのが俺。

改めて雑誌を読ませて貰い、気になる言葉を見つけた。

『自分探しの旅』

等身大の自分がわからない俺には、これがキーワードになるだろう。流石にゲームのように世界を旅するわけには行かない。学校もあるし。

旅Ⅱ冒険だ。

冒険Ⅱ危険がいっぱい。

というわけで自分探しの為に危ない橋を渡ろうと思う。

どこと無く間違っている気もするけど……。

とりあえず外に繰り出す。

一応の目的地はちよつと遠いが大きめの公園にしておこう。

自分探しの旅だもの、ちよつとは遠出しなくっちゃ！

恰好は長袖のシャツに薄手のジャケット。下は最近履き始めたジーパンだ。

春も終わりに差し掛かっているが、まだ少し肌寒い。

公園の中も色とりどりの花ではなく、どこか頼りない緑で満ちている。

そんな中、湯気を立てながら走っている人が居た。

上下とも濃紺の長袖ジャージに僅かに乱れたショートヘア。

若干釣り目気味な瞳は力強い光に満ちている。

なのに一目で女性と判るのは、揺れる二つの膨らみが……。

「あっ！」

「ん？」

思わず声がでる。知り合いと言って良いのか微妙だが、俺はこの人を知っている。

向こうは気付いていないのだろう。突然声をあげた俺を訝しげに一瞥するが、足を緩める様子はない。

挨拶をしようとして体が強張る。トラウマの一端が首筋を撫でる。ぐんぐん近付いてくる彼女はやはり止まらない。

このままやり過ごしてしまおうという考えが鎌首をもたげる。

いや、駄目だ。

今日は自分探しの旅。

危ない橋を渡るんだ！

「こんにちは、薫さん！」

ぴくりと反応する薫さん。僅かにスピードを緩めるが、まだ止まらない。

変わったのは、すれ違いから正面衝突するコースになったただけだ。

「え、ちよつと薫さん！？」

「ああ、やはり君か」

ぴたり。と薫さんは俺の目の前で綺麗に止まる。

文字通り目の前。身長は俺よりかなり高いから、覗き込まれる格好だ。

汗で艶やかに濡れた睫毛に、ふっくらとした唇。

なにより、触れるか触れないかの所にむ、胸が。

「確か、雪のおもうとなかずにゃ『弟の一馬です！』ん……」
間違いなく薫さんだ。

「ていうか近いです！」

トラウマを刺激されたのと顔とあれが近くにあるので、汗が出そうだ。

「ああ、すまない。汗くさかったかな？」

「や、そんなことは全然ないですけど」

むしろ……ごほん。

一歩だけ薫さんは退いてくれた。近すぎた距離が少し離れ、寧ろ全体像がよく見える。

どこか見覚えのある整った顔は険しく歪められていた。

「……どうしたんですか？」

「ん、いや……。私は極端に目が悪くてね。この距離でもぼやけるんだ」

「ああ、それでさっきもやたら近かったんですね」

「一応声と雰囲気でわかったんだけどね、念のため」

「大変ですね」

両目とも2・0の俺には縁遠い世界だ。

「ま、慣れだよ慣れ。普段はコンタクトや眼鏡があるしね」

眉間から険が抜け、ふっと表情が緩む。柔らかさが直接届くような綺麗な微笑。

ドキッ！

キュン！

ウィーン――

さて、何かがおかしい。

「ず、随分この前と雰囲気違いますね」

「ん？ はは、まあね」

微笑がちよっと困ったように薄くなり、照れが見え隠れする。

「……ちよっと冷えるな。どこかお店に入ろうか」

強めの春風は確かに少し冷たい。汗だった薫さんには尚更だろう。

しかし、薫さんには悪いが同意出来ない理由がある。

「え、でも俺、財布持っていないんで」

「なに、軽食位なら奢るよ。この前のお詫びさ」

有無を言う前に薫さんは結構なペースで駆け出して行く。

なんて男前な人なんだろう。

線の細い後ろ姿でも、オーラが俺とは比べものにならなかった。
俺にオーラがないとかじゃなく……と思いたい。

公園から走ること暫く。軽く汗が出る程度に体が温まり、風が気持ちいい。

前に行く薫さんのペースは初めに見たときよりも随分ゆっくりだ。

「誰かと走るというのも、久しぶりだな」

「昔は、走ってたんですか」

会話が出来る程度の速度、といえばわかりやすいだろうか。

「ん、まあね……と、着いた」

「とと……！」

ぴたり。綺麗に止まる薫さん。対してたたら踏む俺。

なんとかぶつからずに済んだが、ちょっときまりが悪い。

「ふふ」

「あ、ははは……」

馬鹿にした笑いじゃないのは分かる。分かるけど、やっぱり恥ずかしい。

「ごめんごめん。なんだか懐かしくてね」

「懐かしい？」

なんでもないよと手を振って、薫さんは店の中に入っていく。

慌てて付いていくと、柔らかい声に出迎えられた。

「いらっしやいませ」

「ただいま」

ただいま？

「あら、お帰りなさい」

お帰りなさい？

ここは飲食店だから、いらっしやいませは正しい。そのあとがおかしい。

ただいまにお帰りなさいって、まるで家のようじゃないか。

「驚いたかい？」

見計らったかのようなタイミングで薫さんの声が滑り込む。
曖昧に頷くが、薫さんからの説明はない。そのまま奥の席に案内される。

年季の入ったテーブルに着いて、やっと薫さんは口を開いた。

「まあ、なんとなく予想しているかも知れないけど、ようこそ我が家へ」

「飲食店ですか」

「何代か前から続いている、常連頼みの小さな店さ」

ぐるりと見回してみるが、確かに大きくはない。

が、お客さんの入りは悪くない。半分ほどは埋まっている。

「さて、何が食べたい？」

声に意識を引き戻され、視線がテーブルに落ちる。

目の前にはメニューが差し出されていた。

「あ、いや、だから財布が……」

「大丈夫だよ。ここは家の店だしね」

「や、でも悪いですよ」

「なら、今度普通に食べに来てくれないかな？　こんな店だから常連になってくれたら助かるし」

ツケも効くしね。と、どんどん押されていく。

「……そういうことなら」

「じゃ、今日は常連さん獲得記念に奢ってあげよう」
ツケで。という前に回り込まれてしまった。

「えー」

「あんまりしつこいとモテないゾ」

モテない。今まさにモテるための努力をしている俺には鋭過ぎる言葉。

「じゃ、また絶対来るんで、今日はご馳走になります」

「よろしい」

満足そうな薫さん。完全に言い負かされた気分だが、店に入った時

点で負けていたようなもんか。

良心的な値段のメニューから、サンドイッチを一つ頼む。

注文を繰り返し、ジャージ姿の薫さんは店の奥へと消えていった。

暫くして、シャワーを浴びたらしい薫さんがサンドイッチを持ってきてくれた。

その分相当時間がかかったが、文句はない。ただだし。

「あ、おいしい」

「それはよかった」

結構ボリュームのあるサンドイッチは食べ応えがあり、味も良い。妙にふりふりしたエプロンを着た薫さんは、とても良い匂いで上機嫌だった。

俺の方も今日は嫌な事が一つも起きておらず非常に気分が良い。やはり自分探しな旅は成功だ「ところで一馬君」と思ったのに。

「なんですか？」

幸せを噛み締めながら食べていると、飛んで来た質問。

「これ、どう思う？」

「可愛いエプロンだと思いますよ」

「着てみないか？」

「……え？」

するりと伸びてくる腕。反射的に避けようとするが、簡単に捕まってしまう。

「ただ飯記念に一つ」

「どういう記念ですか！」

目がいつかの時の様に蕩けている。絶対変なトリガー入ってる！有無を言わせぬ迫力に抗うことが出来ず、ズルズルと奥へと連れていかれる。

それからのことは、思い出したくもない。

危ない橋じゃなく、変態の崖から落ちそうになったただけ言っておく。

「……こんなモテ方じゃなく、ちゃんとモテるまでもうちょっとだけ
続くんだ！」

「一馬！自分探しどうだったー？」

「母さん……いや、まあなんというか」

「なかなか可愛い『等身大の自分』ね」

「なんで写真持ってたの！？」

「私が薫から貰ったの見た」

「姉ちゃん！」

「でもこれじゃ『等身大お人形』ねー」

「また面白い話？」

「雫……。お前はなんでこういうタイミングで出て来るんだ」

「あ、雫ちゃん一緒にみよー」

「うわ……」

トラウマばっか増えてる気がする。

その4　ぷり☆きゅあ

俺は榊原　一馬。ゆるふわモテカワを等身大のままクールに目指す、プリティでキュアキュアなぶっちゃけありえなボーイだ。

今まで以上に意味が分からなくて、俺もぶっちゃけありえないと思う。

だが小学六年生とは思えないほど大人びた妹の好きなものだ、大丈夫だろう。

妹を無条件で信じるのも兄の役目。

とはいえ、何がどうなっているのやら。

「おーい雫」

「なに？」

「これどうした？」

目の前に並ぶぬいぐるみやステッキらしきものに衣装などなど。

俺と雫は部屋が共用なので、こういったものがあるのは知っている。だが大体のものは押し入れに仕舞っていた筈だ。

というか大掃除の時に一緒に片付けた。

それが勢揃いだ。

「最近カズマ、零兄ちゃんとか雪姉ちゃんに色々聞いてたでしょ」

「ああ、まあ」

ろくな目にあってないけど。

「次はわたしかなと思って、忍び込まれる前に持ってきたの」

「忍び込むも何も同じ部屋だぞ」

えー、と可愛らしく唸りながらこちらを見上げてくる。

心なしか眼が輝いて見える。いや、これは輝いている。

今回は初っ端から嫌な予感が全開だ。しかも逃げられる気がしない。

「まあいいや。ねえカズマ」

「呼び捨てやめい！」

悪あがきは大事。出来るだけ話題を逸らそうとして見る。

「ねえカズマ兄ちゃん」

うわーいつになく素直。

「一緒に着よ！」

「嫌に決まってるだろ！！」

何が悲しくてまた女装せななんのだ！

このままでは本当に変態の崖に落ちてしまいそうだ。

「大丈夫だよ、絶対似合うから」

「なおさら嫌じゃ！！」

俺はモテる男を目指してるの！

女装が似合うモテる男なんて居てたまるか！！

「大体お前、俺が女装させられてる写真見て引いてただろ」

「あまりに似合い過ぎてたからね」

それはそれでシヨックだ。涙を流さず泣いておこう。

「ねえ、お願いカズマ兄ちゃん！ 友達の子供っぽいからって着てくれないの！」

そりゃ雫、女兒向けなんだから当然の反応だぞ。

「大体、サイズが合わないだろ」

「作ったから大丈夫」

その情熱をもっと他の所に向けなさい！

「というか、カズマ兄ちゃんはわたしの服着れるから大丈夫！」

「うぐ……」

確かに着れる。というか、雫の方が若干背が高い。

「ね、お願い！！」

「……………わかったよ」

「やったー！」

雫は妹だ。見た目関係なしに可愛いし、大切な家族だ。

それに、一年しか違わなくても俺はお兄ちゃんだ。頼られた以上は答えてやらないとな。

それが例え、女の子向けアニメの女装コスプレといえど。

……やっぱり嫌になってきた。

「それじゃあ一馬、こっちに来なさい」

「待て、姉ちゃん。どっから湧いた」

「ふ、面白そうなニオイがしたからね」

答えになってねえ。

「雪姉ちゃんには先にお願ひしておきました」

ああ、元から逃げ道なかったんだな……。

「頑張れよ一馬」

「兄ちゃん……。いつから」

「面白そうなニオイがしたから」

理由と場面を同時に述べて、兄貴は腰をおちつける。

諦めきった俺の頬から一筋なにかが零れていった。兄貴はそれを笑った。

「二人はぶりきゅあー！」

自分の置かれた境遇を嘆くより、切り開く為に剣をとれ。

……遠い誰か、俺に剣を下さい。

「こら○ユアホース！　ちゃんとしなさい！」

「ぶ、ぶりきゅあー」

ぎしぎしと筋肉を軋ませて、どうにか笑顔を作り声を搾り出す。

ぎりぎりと胃が痛む音が聞こえてくる。

対照的に俺以外が楽しそうなのがまた腹が立つ。

妹はふりふりした鮮やかな白衣を身に纏い、同色のステッキをくるくる。

満面の笑みで跳んだり跳ねたり忙しい。

それなりの露出とこだわりのハイソックスで男受けするらしいのだが、全く喜べない。

妹だから。というのもあるが、俺自身色違いなだけの黒衣を着ているせいだ。

恥ずかしい。そしてその恥ずかしさに慣れてきている自分が悲しい。兄貴は大笑いするでもなく、温かい視線を妹に、生暖かい視線を俺

に向けるだけ。

保護者のごとく遠い目をするのが尚更カンに障る。

それがまたカッコイイから手に負えない。

元凶と言えなくもない姉ちゃんは、メイクの出来に満足しきっているのか、何も言わない。

薫さんは、カメラをパシャパシャ忙しい。

「悪霊退散！」

「甘い！」

渾身の一撃は兄貴を盾に防がれた。兄貴は兄貴で綺麗に受け止めた。

「な、ん、で、薫さんが居るんですか！！」

「可愛いニオイがしたからさ！」

どんなニオイだどんな！

「姉ちゃん！」

「いや、私は知らないわよ」

「あー俺が呼んだ」

手を挙げる愉快犯。兄貴。

理由を聞いたらどうせ面白そうだからとか言うに決まってる。

「そういうことだ」

「心を読むな！」

「ねー、つまらない」

くいくいと裾を引っ張る雫。

「今日はわたしの日でしょ」

「雫……」

「今はキ○アドロップ！」

俺に味方は居ませんか？

「みんなーお茶が入ったわよー」

独特の間延びした声。母さんだ。

収まり切らないこの場に、さらに嵐がくるのか……。

茫然としていると、裾を引く力が強くなってきた。

「ドロップ？」

「今日はわたしの日なの！」

引っ張られるままに窓際まで体が動く。

雫は裾を離し、何の躊躇いもなく、飛んだ。

さて、ここ二階だぞ！

全身が粟立ち、血が逆流する。

気付けば体は空にあった。

「んの馬鹿！」

斜め上に飛んだ雫と、真横に跳んだ俺。

僅かな角度の違いが俺と雫の放物線を結ぶ。

ぎりぎりで抱き留め、窓を振り返る。兄貴が体を投げ出す様に手を伸ばしているが、遠い。

浮遊感が消え、重力が全身をはい回る。

心音が遠い。引き延ばされた感覚が僅かながらも思考時間を捻り出す。

体中のバネを軋ませて、雫が上になるように捻る。

刹那の空白。誰の声も聞こえない、落下の瞬間。

乖離していた現実が、たたき付けられる。

ぼふん。

ゴッ

柔らかい衝撃とめり込む肘。

「がふっ！？ 痛っ……。生きてる！？」

荒くなった呼吸と心音が、逆に生命を強く意識させる。

巡る血流が熱い。ちかちかと視界が明滅している。

「雫！！」

「大丈夫だよ」

聞き慣れた声が耳朶を打ち、漸く安堵が全身に拡がる。

死ぬかと思った。

いや、冷静になれば家の二階から落ちた位じゃ死なないか。打ち所さえ悪くなければ。

脱力感に従い、両腕を投げ出す。そこで初めて気付く。

妙に地面が柔らかい。

「ごめんな一馬」

「……父さん」

見回してみると、テレビで見るとような巨大なクッションが下にあった。

「ちゃんと準備してたから大丈夫だよ……」

「……ふざけるなよ」

悪いとは思っているのだろう。語調に力がない。でも、これはそういう問題じゃない。

「雫！」

かっとなる。その言葉を実感する。

感情が言葉にならない。行動が制御出来ない。振り上げた掌は、父さんに掴まれていた。

「一馬」

静かな声。名前を呼ぶだけの、小さな声。

その声に含まれる物を、俺には読み取ることが出来ない。

そして、目の前で震えている妹を叩くのも、出来そうになかった。

「大丈夫!？」

「雫! 一馬!」

「二人とも怪我してないー?」

「……無事の様だね」

姉ちゃん、兄貴、母さん、薫さん。

皆が慌てて下りてきた。

いろんな物を飲み込んで、小さく息を吐く。

「雫」

「ひっく……えっく……」

鳴咽を噛み殺す妹を抱きしめて、とんとんと背を叩く。

「一緒に謝ろうな」

「がずまはわるくない」

「俺も飛び降りたから」

「でも」

「な？」

きっと、女装してなかったら決まってただろうな。

「……カズマ兄ちゃん」

「んー？」

「この前はごめんね」

「もうするなよ。それか、事前に言っとけよ」

「うん」

「よろしい」

「それでね、お礼がしたいんだけど」

「ん？」

「こっち向いて？」

「……なにこれ」

「この前の衣装。あげる」

「……え？」

「似合ってたから！」

「いやちょっと待て!!」

変なキャラがついてしまった!？

その5 り・すたーと

俺は榊原 一馬。ゆるふわモテカワプリティキュアを等身大のままクールに目指す、無理が出て来た男だ。

もう何がなんだかわからない。

見た目が良いのにどこかズレてる兄妹妹両親の影響か。

結局モテモテになれないどころか、変なキャラとトラウマばかり出来てしまった。

これはもう一旦リセットしてしまおう。そして家族を頼るのはやめよう。

「そういうことだ」

「どうということ？」

やはり頼るべきはカッコイイ友達だ。

「拓也、お前だけが頼りなんだ」

「脈絡がないんだけど……」

6時間に渡る授業が終わり、心身共に解放された瞬間、俺は心当たりを捕まえる。

「かくかくしかじか」

「伝わるか！」

スパンと後頭部に一撃。この無駄にキレのある割に痛くない突っ込みは……。

「友達B！」

「誰がBだ！　せめてAにしろ」

「それでいいの……？」

いいのだ。

「で、一馬。何がどうした」

「やたらノリが良く突っ込み上手なこいつは早乙女 純。無駄にデカイ」

「お前がちっさいだけだ。あと、安いボケするな」

「安くないボケは買わなくせに」

「そもそも売り物じゃねえ」

「滅多に出ないしね」

手厳しい。

ちなみにオチを担当するのは『鈴木 拓也』心当たり本人だ。

癖の強い茶髪の猫っ毛にぱっちり二重。いつもにこにこと人当たりが良い奴だが、たまにどす黒い。

我が家の姉ちゃんには『現実にはありえないかわいいシヨタ』と良くわからない評価をもらってる。

「そしてモテる」

「まあな」

「そしてこの勘違い甚だしいデクの棒は黒い以外に特徴がないのが特徴の野球馬鹿だ」

「一馬は時々難しい言葉を知ってるよね」

「否定かフォローする間をくれよ……」

野球馬鹿が煩いが、俺にはアウトオブ眼中。用があるのは拓也の方だ。

「単刀直入に問う、どうすればモテる？」

「そういうのはお兄さんに聞けば？」

「兄貴は当てにならない。というか、酷い目にあった」

「まあ、零夜さんだからな……」

拓也も純も小学校からの友達だ。なんどか家に来たことがある。そしておもちゃにされたことがある。

辛い記憶を共有しているというのは、そのまま強い絆になる。

「わかったよ、何か考えてみる」

「俺も手伝おう」

「恩に着るぜ拓也」

「俺は？」

強力な協力者が出来た。しかも真面目な。

これは次回あたり期待出来そうな気がするぜ！

「俺も手伝うって！」

「じゃ、また明日な」

「おーい俺も……」

「一馬」

軽く咎めるような拓也の声。

大丈夫。分かってる。だから俺は頼ることにしたんだ。

「頼んだぜ、親友二人！」

「おうよ！」「うん」

軽く手を挙げて、意気揚々と教室を出た。

学校からの帰り道。家とは反対方向へ。

さっきのやり取りを振り返る。

……冷静になると少し恥ずかしい気がしてきた。

最近いろいろあったから羞恥心というものが麻痺している。

問題なのは、まあいっかと開き直りかけていることだ。

どうしたもんかな……

などなど考えながら歩くこと10分。目的地に到着。ちよつとぼろい定食屋。

結論が出る前に着いてしまった。まあいいか。

考えるのをやめちゃいけない気がするけど、まあそれもいいか。

緩い空腹に背を押され、自動じゃないドアに手をかける。

ゆっくりと体を押し込むと、定形句が降って来た。

「いらっしやいませ、御主人様」

「ちよつと待った」

ここはいたって普通の定食屋の筈だ。その筋の店じゃあない。

実際内装はこの前来た時と何も変わっていない。

つまりはありえない。

「放置プレイとはレベルが高いね一馬君」

「意味がわかりません、薫さん」

中学生にはまだ早いか。そう呟く薫さんは相変わらずよく分からないそう、薫さん。なんだかふりふりしたエプロンを着て豊満な胸を隠すようにトレイを持っている。

「なんでいるんですか」

「当然じゃないか、家の店だぞ？」

確かにそこに不自然はないが……

「今日平日ですよ？ 姉ちゃんなら絶対家に居ませんけど」

「だが私は居る。大学生とはそういうものだ」

……そうなのか。

考えたところで中学生の俺に分かるはずがない。

「本当に来てくれたんだね」

「あーまあ、約束ですし」

美人の微笑はずるい。なにもかも流されてしまう。

「それでは、奥の席にどうぞ」

言われるがまま席に着き、メニューを手にとる。

「ご注文が決まりましたらお呼びください」

「ども」

前と同じ、手頃な値段の軽食とドリンクが並んでいる。

今日からは当然自腹だからありがたい。

二、三度目を通して注文を決める。やっぱり前食べたサンドイッチにしよう。

薫さんを探すために視線を上げ、店内を見回す。

時間が時間なためか、お客さんは少ない。

今度来る時は拓也と純も一緒に……

「えっ」

無意識に声が漏れる。

胃の辺りが跳ね、座っているのに浮遊感で叫びそうになる。

全身に痺れるが走り、不意打ちに止まっていた感情が爆発する。声をかけたい。気付いてほしい。怖い。気付かないでくれ。

ぐちゃぐちゃに混ざった心の声は、喉の奥に詰まって出てこない。伸ばそうと持ち上げた手が震えている。

「神崎さん？」

飛ばした筈の声はか細くて、何処にも届かないで地に落ちた。

……違う。

届かないのは届けようとしなからだ。

分かっている。自分で声を絞って、届かなくしている。

怖いから。恥ずかしいから。嫌われたくないから。

自分勝手な恐怖に縛られているだけだ。

動け！

「神崎さん」

「御呼びですか御主人様」

精一杯吐き出した声は、予想外の人に拾われた。

ばたばたと小走りで近寄ってくる薫さん。

「注文は決まったのかな？」

「あ、はい。この前のサンドイッチで」

「承りました」

注文をメモし、来るとき同様小走りで去っていく薫さん。

呆気にと取られているうちに、神崎さんは見えなくなった。

店の中に居たのにどこへ？ わからない。

分からないけど、いないんだ。

どっと、力が抜ける。

今更ながら心臓が五月蠅い。

声をかけられなかった後悔と安堵がぐるぐる回る。

しばらくして運ばれてきたサンドイッチ味も、この前よりわからなかった。

「薫さん？」

「はいこれ」

「なんですかこれ？」

「サービスのドリンク」

「サービスって……なんですか？」

「なに、ちょっとしたお詫びとお礼と」

「なにかありましたっけ？」

「ふふ、面白くなりそうだよ」

「なにかあるのだろうか……」

その6 フルスイング

俺は榊原 一馬。

「いくぞ一馬！」

「……こいつ！」

全身を緊張させながら、両肩だけ無理矢理力を抜いている。

見据えるはマウンドの上にいる色黒の友人。早乙女 純

中学一年生には見えない長身を目一杯に活かし、圧倒的な存在感をたたき付けてくる。

飲み込まれそうなほどのプレッシャー。バッターボックスに立つ自分が酷く頼りなく思えてくる。

「……っ！」

一球目が飛んでくる。

積み上げた経験が、付け焼き刃程度には役に立つ。

無意識に突き出した両手が、その先にあるバットが。

悲鳴をあげる。

「ふぁーるー」

鈍く高い音。矛盾したような衝突。

痺れが連鎖していくように、心にまで届く。

「HEY！HEY！HEY！ バッタービビってる！ 震えてんじやねえーぞ！」

「どうした一馬？」

見透かすような純の声。

どこか間の抜けた拓也の声。

「武者震いだよ……！」

限界まで虚勢を巡らせ、体勢だけは崩さない。

一度バットから片手を離し、痺れを払い握り直す。

マメが潰れて固くなった掌。馴染んでしまったグリップの感触。

三ヶ月前の自分からは想像出来ない変化。

なんでこうなったんだっけな。

「次いくぞ！」

「こいよっ！」

場に集中して溶けていく意識が、引っ張られるように過去へ飛んだ。

「やっぱ野球だろ！」

春の終わり。夏の手前。のんびりした空気の流れる昼休み。

梅雨に入り安定しない気温と湿気にやられたのか、野球馬鹿が騒ぎ始めた。

「脈絡って言葉知ってるか？」

「知らん！ なにそれ？」

本物の馬鹿か。

「まあ純だもんね」

対面でサンドイッチを食べていた拓也が、適当に場を流す。

くるくると髪を弄りながら、流れるように毒を吐く。

癖の強い猫っ毛はこの時期いろいろ面倒らしく、若干機嫌が悪い。

表情は柔らかいのだが口調がキツイ。

が、馬鹿はそんなこと気にしない。

「まあいいや。とりあえず野球だ」

「何がどうなってなんで野球なのか説明しろよ……」

うざったいくらいに自信たっぷりには喋り始めた。

「かくかくしかじ」「同じネタ禁止ね」かなんて言わないよ絶対」

拓也がちよつと怖い。

「……ごほん。いや、一馬がモテモテになりたいっていったじやねえか」

確かに言った。そして協力を求めた。

「これは野球しかないなと」

「意味が分からんぞ」

「……純だもんね」

「最後まで聞いてから止めろよ」

肩を竦めてようやくとまともに説明をしてくれた。

雑談混じりでやたら時間はかかったが。

纏めると。

九月に球技大会がある。

種目を野球にする。

そこで活躍してモテモテに。

なんともわかりやすい作戦だった。

「種目を野球にとって……出来るのかあ？」

「知らなかったのか？ 俺は体育委員だ」

「確かに種目は体育委員が決めるんだろうけど……」

一年の意見なんて通るのか？

「まあ実際には先輩に頼ることになるんだけどな」

聞けば体育委員の大半が野球部らしい。

「ま、だから多分野球になる。というか、する」

「数の暴力だね」

既に種目は決まったようなもんだった。

「それは別に良いんだけど、一馬」

「ん？」

「……頑張ろうか」

「……ああ」

言葉を飲み込むような間を空けて、拓也と手をたたき合う。

何も言わない我が儘に、何も聞かない気遣い。

見た目以上に繊細な気配りが出来るから、拓也はモテるのかもしれない。

「そうと決まれば特訓だな」

「一所懸命に頑張る男はモテるらしいし、ちょうどいいね」

「特訓だったって、何するんだよ」

自慢じゃないが、野球は全くやったことない。

「なーに、この未来のスラッガーにして大エース、早乙女純様に任せとけ！」

「まったく、どこが大エースだ……」

割と酷い目にあった。

目立つならピッチャーだが、まともな投球が三ヶ月かそこらで出来るようになるわけがない。

かといって守備練習してもそうそう目立つファインプレーを狙える球なんて飛んでこない。

だったら確実に回ってくるバッティングを徹底的に鍛える。

野球関連の純の理屈は全面的に同意出来るし、するけど……

「腰が痛い」

デッドボールが多すぎるんだよ……

特訓内容はいたって単純。

アップして、筋トレして、ひたすらにバッティング。

キャッチャーは拓也が、ピッチャーは純がやってくれたんだがコントロールが酷い。

初級から顔面に当たりそうになった。

それから五球に一球はデッドボールコース。

そのくせ球速はあるもんだから、避け切れずに何回か当てられた。

お詫びと練習用のバットを貸してくれたが、釣り合った気がしない。

「だいたい、自主練する体力なんて残ってないよ」

なれない運動に物理的打撃で体はボロボロ。

「なのに、なんで家と逆方向に歩いてるのかね」

決まっている。

悔しかったからだ。

暗くなるまで延々バッティング練習をしたのに、ヒットどころかま

ともに前にも飛ばせなかった。

ほとんどが空振り。よくてチップやキャッチャーフライ。何も知らない素人だからとか、言い訳は出来なくもない。

「そういう問題じゃないんだ」

俺はモテたい。カッコイイと言われたい。

今日の俺は、とことんまで情けなかった。

夕暮れすぎの暗い公園。

街頭の明かりも遠くなるような、広場のど真ん中。

学生鞆を放り投げて、一心不乱に素振りを始める。

肩が直ぐに重くなる。腰がぎりぎり悲鳴をあげる。

それでも両の足だけは、力強く地面を踏み込んでいる。

「ふ、ふ、は、は、はは」

声にならない呼気が漏れ、鈍い風切り音だけが耳に届く。

へとへとになっても振り続けて、いい加減肩が上がらなくなったところ

で素振りをやめる。

崩れ落ちる体が、酸素を求めて喘ぐ。

凄くしんどい。けれど、辛くはない。

充足感に包まれながら、少しだけぶっ倒れる。

夜の帳はおりきって、梅雨の晴れ間に星が浮かぶ。

明滅する街灯に、雲を抜ける月明かり。

風情ある景色。だと思う。よく分からないけど。

とりあえず、デカすぎる腹の音は場違いだってことは悟った。

「あー夕飯食べてないもんな。つか家に帰ってもないし」

これでも育ち盛りの男子中学生だ。空腹は敵。

ちやっちゃんと家に帰ってご飯を食いたいけど、そこまで体力は回復してない。

ならやることは一つ。

立ち上がり、家とは逆方向へ歩く。

常連目指して、売り上げに貢献することにしよう。

「いらっしやいませー、一馬君」

「ほんと、いつも居ますね薫さん」

「いつもって訳じゃないけどね」

君のタイミングが良いのだよと、にこやかに応えながら席へと案内してくれる。

夕飯時を過ぎた店内にはあまりお客さんもない。

その証拠とばかりに薫さんが対面に座って話しかけてきた。

「今日はこんな時間にどうしたんだい？」

「ちよつと、なんというか、特訓を……」

「ふうん？」

「とうか良いんですか？ 仕事しなくて」

「本来なら私の役目は終わってる筈なんだ。これくらいの我が儘は通すよ」

よく分からないが逃げられないらしい。

「しかし、特訓とはね。なんのかな？」

「なんとなく秘密です」

「それは野球部のバットを入れているケースと一緒に物だね」
バレバレな気がする。

にやにやとにこにこの中間くらいの表情で、頬杖ついて覗き込まれる。

思わず目を逸らして、早口で注文を告げた。

運ばれてきたいつものサンドイッチと、頼んでいないドリンク。

「これは？」

「頑張る若者へのサービスさ」

「……ありがとうございます」

サービスされてばかりだ。

「特訓もいいけど、家には連絡とりなよ。雪が心配していた」
メールがきてね。と携帯をひらひら。

完全に忘れてた。もう9時前だもんな。

「……明日からも特訓はするのかい？」

「はい」

即答した事に自分でも驚く。心はいつの間にか決まっていた。

「なら、毎日おいで。ドリンクくらいはお姉さんがサービスするよ」

「いや、そんなの悪いですよ」

「中学生なんだから甘えときなさい」

とん、と額を突かれる。

姉ちゃんといい薫さんといい、年上の女性には何を言っても勝てないな。

それから三ヶ月。毎日学校帰りに素振りした。

休日や夏休みにはランニングや筋トレもして、体力作りも万全。

マメができて、潰れて。それでもバットを振り続けて。

いつの頃からかバットが空を切る音も、鋭くなっていた。

そうして迎えた球技大会本番。無事に種目は野球になった。

充実した気力と体力。調子はすこぶる良い。

だが、始まって直ぐに拍子抜けした。

学年別に行われる試合は、歯ごたえが全くなかった。

普段の練習か、俺との付き合いのせいかな純のコントロールは信じられないくらい良くなっていた。

元々あった球威に加えてコントロールまで加わり、手加減しているようだが誰にも打たれることはなかった。

そもその話、他のクラスからやる気を感じられなかった。

不完全燃焼のまま大会が終わり、三ヶ月の特訓はなんだったんだろうか。体育委員が片付けをするのを見ながら、ぼーっと考える。

意味がないとは思わない。けど……。

「しけた面してんじゃねえよ！」

ゆるい放物線を描く白球。

それを受け止めて焦点を合わすと、不敵に笑う純が見えた。

「純？」

「話し、付けて来た」

「なんの？」

「勝負だ」

冗談。には見えない。

「盛り上がらない前座で終わっちゃ納得いかねえだろ」

「もともと、こうする予定だったしね」

いつの間にか拓也も野次馬を引き連れて純の傍に立っている。

「俺らで始めた我が儘だ。きっちり俺らで締めるぞ」

「……望むところだ！」

そして、冒頭に立ち戻る。

「っ！」

二球目はストライクゾーンを僅かに外れた。

「ぼーる」

キャッチャーの拓也がコールし、球を純へと投げ返す。

分かりやすい一打席勝負。ヒット性の当たりで俺の勝ち、打ち取ったなら純の勝ち。

フォアボールの場合は仕切直した。

ワンストライクワンボール。

勝負は始まったばかり。息を飲むような展開ではないせいか、野次馬が少々煩い。

三球目が飛んでくる。

半瞬、反応が遅れた。

僅かに乱れた集中が体を硬直させ、ひりつくような焦燥に踏み込みを躊躇う。

ただ見開いた目だけが、その戸惑いを肯定する。

（落ちる……！？ カーフかつ！？）

振り切る前にバットを戻す。

急激な切り替えしのせいで筋肉に強い負担がかかる。

「ぼーるー」

結果的に、野次馬に気を取られた事が俺を救った。

「チッ……。どうした、手が出ねえのかよ」

「よく見てると言ってくれよ」

自分の声が強がりになしか聞こえない。正直、今の球は打てなかった。いつもの速球と使い分けられたら勝てる気がしない。

バットが重くなる。

「つまんねえな……。次いくぞ！」

「くっ！」

どっちだ！？

純の手を離れ一直線に飛んでくる軟式球。

のんびりと考える余裕なんて当然ない。刹那に判断を下し、振り切る。

「すとりいく」

まるで嘲笑うように、ボールはバットの下をすりぬけていった。

「はっ！ 追い込まれたな！」

ツーストライクツーボール。確かにこっちは後がない。対して、向こうには一球の遊び玉。

形勢の悪さに心が侵略されて、注目に食いつぶされそうになる。

……。怖い。

「一馬」

足元からの拓也の声。気付けば視線が落ちていた。

「信じるよ」

それは、何に対する信頼か。その真意は分からない。けれど、軽くなった。

これは俺の我儘で。こいつらはそれに付き合っ

そして、笑いながら協力してくれている。

「よしっ！」

もう一度片手を離し、ぐるとバットを回す。突き付ける。

「……へっ！ 上等オ！！」

意志を示す予告ホームラン。心が折れてちゃ勝てるわけがない。

「こいよ！」

グリップを強く握り直す。

身体の延長線として、バットの先端にまで意識を巡らせる。

これが、きつと、最後の一球。

キメ打ちだ。

俺の実力では投げられた球を見極められない。振り回されて終わる。
この局面、この流れで純が投げる球。

考えるまでもない。

渾身のストレートだ。

長い付き合い。性格くらい熟知してる。当然お互いに。

純の方も俺の考えくらい分かっているはずだ。

だからこそ、ストレートでくる。

そう信じる。

「一球、入魂！！」

「かつ飛ばす！！」

ワインドアップ。伸び上がる純を視認して、こちらも『ため』に入る。

緩やかに捻りを加えていき、体重を後ろへ流す。

「オオ」

ねじり上がる純の身体。呼応するように息を止め、理性ではなく反応と反射に全てをかける。

拓也の言葉を信じた。

純の性格を信じた。

ならあとは俺自身を、俺の三ヶ月を信じるだけだ！

「ラァ！！」

滑空する勝負球。

世界から音が消える。

染み付くまで叩き上げた付け焼き刃が、頭より早く反応する。足。

ためにためた体重が地面から浮き上がり、流れの基礎を作り上げる。腰と肩。

ほんの半瞬の円運動で、練り上げた力に志向性を与える。

そして眼。

無意識に委ね、反射的に合わせたコース。あとはただ、振り抜く！

「おおおおあああ！！！」

——イイイン

踏み込みと共に全身全霊を注ぎ込んだ。

澄み切った音が響き渡り、土に汚れた白い球が赤い空を切り裂いていった。

爆発するような歓声。野次馬がいまさらのように騒ぎ出す。

「勝った……？」

「ああ、お前の勝ちだよ」

「おめでと一馬」

歩み寄る純と立ち上がる拓也の言葉に漸く実感が駆け巡る。

手の中に残る甘い痺れを握り直し、咆哮とともに突き上げた。

「なあああにをやったるかああああ！！！」

「うげ、高島……」

「おい、話は付けてたんじゃないのかよ」

「俺が話を付けられるのは先輩だけだ！」

「威張るな！」

「タイミングが良すぎるから、高島先生も待っててくれたみたいだ

ね」

「その分怒りもデカそうだな」

「んなのんびりしてる場合かよ！」

「ま、仕方ないよね」

「よーし一馬、拓也」

「「逃げるぞ！」」

「待たんかあああ！！」

結局その後、三人そろって呼び出された。

その7 ろまんちっく

俺は榊原 一馬。ブチブチと雑草を根本から引き抜いている。球技大会から土日挟んで三日。朝一に体育教師の高島に呼び出され、こうして放課後に草むしりすることになった。

九月の太陽はじりじりと肌を焼き、中腰の姿勢が疲労を増加させる。噴き出る汗で目が痛い。

ちらりと視線をあげると、一緒に罰を受けている二人が見える。

純は体力があるためか、それとも野球部の雑用で慣れているのか、わりと涼しい顔で作業をこなす。

皮膚は既に真っ黒に焼けているのでこれ以上の日焼けを気にする様子もない。

縦に長く、横もそれなりにあるがつつりとした身体を深く落とし、力強く草を抜いていく。

それに比べてもう一人の親友拓也は辛そうだ。

純と対照的に小柄な身体は日焼けとは無縁な生活をおくっていたため、今日一日で真っ赤になっている。

いつもふわふわの猫っ毛さえも、汗を吸ったためか萎れている。

それでも表情だけは笑顔を作っているのは拓也らしい。

「疲れたね」

「そうだな」

「休憩しようぜー」

視線に反応した拓也から会話が始まり、一気に空気が緩くなる。

抜いた雑草を入れたゴミ袋は結構な大きさに膨らんでいる。少しくらい休憩しても良いだろう。

中腰から立ち上がり、思いつ切り伸びをする。

こきこきと小気味よい音。全身から僅かながら疲れが抜けた。気がする。

そろぞれが思い思いの方法で体力を取り戻す。

ちょうどよく間が開いた。

「それにしても、ごめんな」

言わなければならぬこと。言いたかったこと。

「俺の我が儘に付き合わせたせいでお前らまで草むしりをする事になった」

「なーにいつてんだよ、らしくねえ」

「こういうときは、ありがとうって言おうよ」

即答。なんの気負いもない返答。

それがなにより嬉しかった。

「しっかしなあ、いい加減聞いときたいんだが」

「ん？」

「一馬お前、告白したいのされたいのどっちだ？」

どんっと心臓が跳ねる。

「何言つてんの純？」

勤めて平静に、とぼけてみるが。

「うわ、こいつ気付かれてないと思ってやがる」

「どう見てもバレバレなのにね」

ジト目の二人はお見通しとにやにや笑うばかりだ。ごまかすことは出来ないだろう。

それに、本当ならもっと早く言っておくべきことだ。

「いつから気付いてた？」

「割と最初から」

「俺も六月には気付いたな」

「んなばかな」

そんなに分かりやすいのか、俺。

「ちなみに、相手もバレてる？」

「当然」

「でも一馬の口から言うべきだよな」
ぐぬぬ。

「わかったよ……」

諦めと羞恥と願望を混ぜて、そもそもの始まりを二人に話す。

俺がモテる男になりたい理由。

字面自体も嘘じゃない。含まれる意図も間違っていない。

ただ、モテたい相手は限定的だ。

「あーつまり、好きな人ができた」

「んなことわかってんだよ」

「誰かもね」

うぐう。

その人と話をしたくて、その人を見ていたくて。

話しかけてほしくて、見ていてほしくて。

「それがモテる男になりたい理由だ」

「まあその気持ち自体はわからないでもないが……」

「いろいろ間違ってるよね……」

家族に強烈な女性がいるせいで同い年の女子ってよくわからないんだよ！

「んで、誰なんだ？」

「ちゃんと言いなよ」

ぐちぐちと引き延ばしてみたが、二人から逃れる方法はなさそうだ。

それに、言うべきだ。

俺のためにここまでしてくれたのだから。

「……んざきさん……」

「誰だって？」

「そんなんじゃ伝わらないよ」

「神崎さんが好きなんだよ！」

「話は聞かせてもらった！」

野太い声に俺達三人は全力で振り向く。

黒の短パンから伸びるこん棒のようにごつごつした足。ぴちぴちの

シャツに包まれた上半身の筋肉。

そしてなにより輝く禿頭。

御歳59歳ということを一部を除き微塵に感じさせない体育教師。

高島先生だ。

いつからそこに！？ などと聞いてはいけない。
無言のプレッシャーに逆らってはいけないのだ。

「榊原！」

「は、はい！」

「お前の魂の叫び、確かに聞かせてもらった」

「忘れてください！」

恥ずかしい！

「だが断る」

うおい！

「この高島 厳のもっとも好きなことの一つは、悩める少年を導いてやることだ」

「とてもいい趣味してらっしゃいますね！」

なんというあくに……ん？

「えー、それはどういことですか？」

「わしが手伝ってやる」

ぽかんと、思考が抜ける。

ナーニイッテンダこのハゲは。

ゴン！

「イタい！！」

ゲンコツ一発。じんじんと芯まで響く。馬鹿になったらどうするんだ！

「榊原、声に出てるぞ」

既に馬鹿でした。

気を取り直して咳ばらい。痛みが響く。

「えーと、高島先生？」

「なんだ？」

「手伝うとはどういうことですか？」

「お前の魂の叫びを伝える場を用意してやる」
「というと？」

「来月末の全校集会で時間をやろう」

「結構です！」

そんな場所で告白なんて出来るか！ やっぱ嫌がらせかこのスキンヘッド！

ゴン！

「学習せん奴だな」

す、スキンヘッドは決して悪口ではないと思います……。

「なら、放送室を貸してやろう。気持ちや歌や詩に込めて伝えるんだ」

この太陽光反射頭の中身は何が詰まってるんだ？

病的なまでに

ドラマチックを求めてどうする！

「無理です！ 恥ずかしいです」

よし、今度は建前を口にできた。

ゴイン！

「なぜに！？」

「ふむ、失礼な気配がしてな」

畜生このエスパー・ハゲが！

ゴツン！

「話が進まん」

「すいません」

多少理不尽でも我慢する俺かっこいい。そういうことにしよう。

「とにかく、高島先生。俺にはそんな大それたことできません」

そんな度胸があるならこんなところで草むしりなんてしていない。

「そんなことないと思うよ」

しばらく黙っていた拓也が、俺の拒否の言葉を否定する。

「確かに、昔の一馬には無理だったろうが、今の一馬なら」

純まで拓也の言葉に乗っかかり、俺から逃げ場を奪っていく。

「よし、決まりだな」

「マジですか」

にんまりとミスターが笑う。反射光が眩しい。

両肩をがっしりと掴まれて、動くことが出来ない。

「頑張れよ少年」

脂っこくも爽やかな笑みが、きらきらと輝いていた。

「どうしてこうなった」

「まあ良かったじゃねえか、目立つぜ？」

「恥ずかしいだろ！」

「いまさらじゃない？ ほら」

「うげ、拓也！？ どうしてその写真を！？」

「この前遊びに行ったときにね」

「雪さんが見せてくれたぜ」

「こんなことが出来るなら告白くらい余裕だよ」

「そういう問題か！」

親友二人にトラウマを握られた。

その8 インターバル

俺は榊原 一馬。何だかよくわからないうちに何故だかよくわからないのだが何と言うことだ、全校集会で告白しなければいけないことになった。

言いくるめられたというか、逆らうことを許されなかったというか。ぐちぐちぶちぶちと心の中で文句を垂れ流しながら、眠たい目をぐしぐしこする。

ただ今授業中。

数学の教科担任が、テスト前だから勉強しろと念を押している。球技大会から一ヶ月。ちやほやと持て囃される時間はとうの昔に過ぎていた。

クラスの皆の反応もいたって普通。当然といえば当然だ。

別にそれに何かを思うようなことはない。元々クラスメイトとも上手くやれている。

イベントが終わり日常に戻り、その余韻までもが流されていった。

ただ、俺の様な極小数を除いて。

顔をあげた先。俺の席から斜め左前。何かを書き込む右手が見える。視線をあげれば、真剣な眼差しを向ける横顔も。

一瞬、目があった。

たまたま彼女が振り返った。

慌てて視線を黒板に向けるが、変な風に思われなかっただろうか。目が合った嬉しさと、言いようのない不安にどくどくと脈拍が早くなる。

少し釣り気味の漆黒の双眸。高く筋の通った鼻に整った唇。

それでも気の強そうに見えないのは、彼女の纏う雰囲気柔らかいからだろうか。

再びちらりと視線を送るが、俯いているせいで長い黒髪に横顔すら隠される。

がつくりと机に突っ伏したくなるが、また不意に彼女が振り向くかと思うとみっともない恰好は出来なかった。

仕方がないので授業を聞く。中学校に入ってからずっとこんな調子だから、わりと俺の成績は良い。今度のテストも問題なさそうだ。それでも、日を追うごとに気分が重くなっていく。

なにせテストが終わると全校集会があるのだ。

時間からは逃げられない。何をしても何もしなくても止まらない。戻らない。

日に日に見えない何かに圧迫されていく感覚。徐々に徐々に強く。不安。一言で言えばそれ。ただ、その不安の源はなんだ？

大勢の前に立つ事か？ それならどうして野次馬の前で勝負なんて出来た。

告白が失敗する事か？

いや、それはそうだろうけど……。

それなら俺は、あの時本気で否定したはずだ。

もう俺の覚悟は決まっている。無理矢理で目茶苦茶ではあるけど、少し感謝もしている。

ただの緊張のせいかな？

知らぬ間に俯いていた視線をあげる。吸い込まれるように斜め前に。「っ！」

再びぶつかった目が強く心臓を叩く。今度は逸らすことも出来ない。このままじゃ、意識しすぎて身が持たない。

ちょうど鳴り響いたチャイムの音に、残念ながら救われた。

「ホント、びっくりするくらい解りやすいね」

「何回視線のバッティングをやった？」

昼休み。髪をくるくると触る拓也と相変わらずでかい純にからかわれながら飯を食う。

否定も肯定もしない。俺が神崎さんを好きなことは二人以外知らない。

い。

下手な事を言って皆にばれるのはなんか嫌だ。

「バレバレだけどね」

「なにせ俺が気付いたんだからな」

うーそーだー。

「ま、それも後二週間で終わりだ」

「おい純、それは秘密だろ」

「テストの話だろー？」

にやにやと意地汚い笑顔。

あの文脈でどうすればそうなるってんだ！

「そんなんだから国語の成績悪いんだよ」

「うるへー。他が良いんだからほっとけ。日本語なんて喋れたらいんだよ」

「ちゃんと喋れていたらね」

俺だけじゃなく二人とも成績は悪くない。

俺と純が五教科で400点前後。拓也が450点くらい。

まあ、別に関係ないけど。

だらだらと雑談をしているときは、圧迫感を忘れられる。

そのかわり、時間が早く流れるけど。

放課後。部活のある純と、なにかしら用があるらしい拓也と別れて一人きり。

球技大会が終わっても習慣としてランニングだけ残った。

ほんの少し肌寒い風を切りながら、トットトットと土を蹴る。

体力も筋力も三ヶ月前とは比べるべくもない。

まだまだ明るい4時前の公園。散歩道の先から見知った顔が向かって来た。

「薫さーん」

ぴたり。薫さんが声に反応して綺麗に止まる。
間近まで走り、俺もぴたりと止まって見せた。

「一馬君か。学校帰りかな？」

「はい」

「特訓はまだ続いているみたいだね」

「いや、あれはもう終わりましたけど……。とうか知ってるでしょう？」

一部始終を話たんだし。

「野球の方じゃないよ、好きな人の方さ」

「ナゼソレヲ」

釣り気味の目を緩めて柔らかい表情を作る薫さん。お見通しとばかりに指を揺らしている。そっちの方は話していない筈なんだけどな。照れ臭くて頬をかくけど、熱は引いてくれやしない。

「それよりどうだい？　せっかくだし、一緒に走らないかい？」

「そうですね」

一人で走るより、楽しそうだ。

「どうやって告白するのか、気になるしね」

「あんまり言いたくないんですが」

喋りながら、一步目を蹴り出す。

いつか走った時よりも、速いペースで。

いつかと同じように、喋りながら。

「実は……」

高島先生の思い付きを話したときは、おもいっきり笑われた。

「やっぱり可笑しいですよね」

「ふふ、ごめんごめん。相変わらずだと思ってね」

「どういことですか？」

「体育の高島教諭だろ？　私が中学生の時にも同じように全校集会で告白することになった子が居てね」

「マジですか」

「大マジさ」

「どうなりました？」

「見事玉砕」

うぐう。言葉が詰まる。俺の行く末が見えるようだ。

「でも、本人は満足そうだったよ。こうでもしないと、うじうじ悩み続けたから」

「……そうですか」

俺もそうかもしれない。中学に入学してからそろそろ半年。片思いからも半年。なにも出来なかった。

空回りし続けるくらいなら、碎ける方が良いか。

ぴたりと、薫さんが止まる。

ぴたりと、俺も続き止まる。

たたら踏むようなことはない。少しは成長したのだろうか。

振り返る薫さんの口は、薄く笑みを浮かべていた。

いつものようにお店で一休みしてから帰宅。元気の良い妹の声に迎えられる。

「おかえりー」

「ただいま」

夕飯の匂いが鼻をくすぐる。今日はカレーだろうか。

「お、一馬帰ってきた？」

「姉ちゃん？ 珍しい」

「授業が休講になってねー」

大学生とはそんなものなのだと、ない胸を張って笑う姉ちゃん。薫さんとは大違いだ。

「ない胸で悪かったわね！」

「カズマ、声にでてたよ」

最近何かが抜けてる気がする。拳で頭をぐりぐり。痛いけど自業自得なのでなにも言えない。

「姉貴、それくらいにしときなよ」

助け舟はイケメンから出た。流石兄貴。そつがない。

「今日は賑やかねー」

「雪姉ちゃんがいるからね」

エプロン姿の母さんまで出て来て收拾が付かなくなって来た。

「どうすんだこの状況」

「とりあえず、ご飯にしようか」

背後からの声。低く安定感のある、優しい声。

「父さん？」

「お帰りー」

「今日は早いね」

「お疲れ様」

「お帰りなさい」

思い思いの言葉を受けて、父さんはゆっくり微笑む。

「ただいま」

鶴の一声で場は収まり、久しぶりに家族揃っての夕飯になった。

たらふくカレーを食べた後の風呂上がり。ほてった体を冷まそうと麦茶を持ってリビングに入る。テーブルにソファに大きめなテレビ。フローリングの床が足元からも熱を取っていく。

姉ちゃんは部屋に籠ってレポート。兄貴は彼女さんと電話。雫は……さっきまでソファでテレビを見ていたんだろうけど、今はうたた寝中。

そしてテーブルでは、父さんが一人でお酒を呑んでいた。

「風呂、あがったよ」

「ん、そうか」

麦茶を片手に向かい側に座る。氷の入ったグラスに琥珀色の液体。違うのはアルコールの有無くらい。

「一馬」

「なに？」

母さんと同じ年齢を感じさせない皺一つない顔。それでも兄貴とは違う『渋さ』みたいなものが重厚な気配を作る。

ただ重いだけでなく、包んでくれるような安心感で。

「前に進むと言うのは、難しいな」

「……？」

「漠然と、目に見えない何かと闘いながら人は進むんだろうな」
「なにそれ？」

「お前も大きくなったな」

「そうかな？」

確かに身長は少し伸びたけど、まだまだ兄貴や純の方が高い。

「自分以上に相手を気遣えるなら、大人と言えるかもしれない」
「え？」

「だが、まだまだ子供であることには間違いないんだ。自分勝手に
も良いから、思いきりやりなさい」

「父さん……？」

俺は何も話していない。それなのに、俺以上に俺の中の不安を見通
していく。

「好きな子に迷惑をかけるのは、男の特権で責任だ」

「うん」

「どうなっても受け止めて、笑ってあげなさい」

「……わかった」

カラン。氷が泣く。テレビの音だけ静かに響く。

「うー、にゅ……」

雫の妙な寝言みたいな呻きと一緒に、グラスの中身を飲み干した。

「ソファで寝たら風邪をひくぞ」

「どうせ起きないから、部屋まで持っていくよ」

いつの間にか見下ろすようになった妹を抱き抱えて、リビングから
出る。

扉を閉める前。振り返る。

「ありがとう」

「ん、おやすみなさい」

からからと、空のグラスが笑っていた。

「ふ、ふふふ、やっと話せたよ」

「お父さんは一馬に『相談』されませんでしたからねー」

「帰りも遅いし、休日も殆どなかったからね」

「最近はずっと特訓してましたしねー」

「やはり父親らしいこともしておかないとな」

「それでもしないと出番がありませんからね」

「はっはっは。親はでしゃばりすぎない方が良いのだろう。母さん、もう一杯」

「ダメですよ？ この前の健康診断でお酒を控えるように言われたでしょう？」

「か、母さんー」

母は強し。意味が違うけど。

その9 当たり碎けた

俺は榊原 一馬。何の因果かゆるふわもてかわぷりていきゅあを等身大のままクールに目指す男。だった。

家族に弄ばれ友達に担ぎあげられ女装したりコスプレしたりトラウマを作った。

散々な目にあっただけの様にも思えるが、そうでもない。

辛い特訓を経て迎えた球技大会では親友のお節介な優しさを受け取った。

それも全ては、俺がモテるため。

いや、唯一人、好きな人に好きと言いたいがため。

自分に自信がない俺は、玉砕覚悟での告白なんて怖くて出来なかった。

だから、モテる男を目指した。告白を断られたくないから。

その考え方は間違っている。言われなくても本当は分かっている。けどどそうするしかなかった。勇気があまりにも足りなかった。

「準備は良いか」

「はい」

それも、今日で終わりだ。

高島先生に連れられて、立入禁止の屋上へと上がる。

どこよりも高い場所。行ってみたいと思うだけじゃ、届かない場所。青空に手が届く。太陽が笑いかける。

見下ろした土色の校庭には、白黒の集団。

更衣のこの時期限定のいびつなコントラスト。テスト明けの集会に集まった全校生徒四百余名。長い長い校長先生の話綺麗に整列して聞いている。

これから俺は、告白する。この大人数の前で、唯一人に向けて声をぶつける。

尋常ならざる緊張。だけど、動けないわけじゃない。この半年程で

産まれた数々のトラウマと引き換えに、羞恥を消し飛ばすくそ度胸が付いた。

「ほら、出番だ」

校長先生の話が終わる。空気が弛緩し、ざわめきが産まれた。

一步。何人かが俺の存在に気付く。

二步。親友二人と微笑みを交わす。

三步。立ち止まり大きく息を吸う。

つかの間の静寂に割り込むように俺という存在を張り上げる。

「俺は！ 榊原！！ 一馬です！！」

心臓が早鐘より五月蠅い。喉が泣き叫ぶように震えて声が揺れる。

吸い込んだ息を吐き切ったのに、次が吸えない。

震えが全身に伝播して、脚が体を支えられない。

だ、けど！ 絶対に逃げない！！

「伝えたい事が、あります！！」

屋上の縁に手をかけ、握り、力ずくで震えを殺す。

血管がびくびくとうごめいている。沸騰しそうな頭から汗が滴る。

今から俺は、告白する。

全校生徒の前で、唯一人に向けて心をぶつけるっ！

「神崎さん！ 神崎 楓さん！！」

吐き気すら込み上げてくる緊張の中、思いの丈をぶちまける。

「好きですっ！！」

本当は色々考えていた。綺麗に飾り立ててもいた。

それなのに、土壇場で出て来た言葉は、どこまでもシンプル。鋭く

尖った感情。

「貴女が、好きです！！」

静寂が満ちる。

一拍。二拍。三拍程の膠着を経て、漸く時が流れ出す。

遠いざわめきの大部分は、疑問の言葉だろう。当然だ。殆どの人間

には当事者の二人は他人なのだから。

役目を終えた喉は今更の様に渴きを訴える。ご褒美はもう少し待ってくれ。まだ眼が働いているから。

ふらふらと安定しない体と視線を、自分のクラスに向ける。周りとは比べてまるで混乱がないからわかりやすい。

ずらずらと並ぶ友人知人を辿って、目的の人物を探す。

距離がありすぎて、表情までは見えない。見たくないだけかも知れない。

ぼんやりと、でもはつきりと。

眼が合った。

「あ」

意味を成さない、唯の音。

その音が頭にかかった靄を吹き飛ばした。

血の引く感覚と一緒に混ざり合った感情が分離していく。

一つは羞恥。一つは期待。一つは達成感。

そしてなにより、罪悪感。

俺はなにもかも納得してここに立っている。でも、彼女は？

父さんとの会話が過ぎる。最初から分かっていた。迷惑をかけるってことは。

だから、俺に出来ることは、笑顔を浮かべることだけだ。

どうなっても。どう転んでも。

「よくやった」

「高島先生」

肩に乗る大きな手。力強い優しい手。

「俺、笑えていますか？」

「ああ」

なにもかもが滲んでなにも見えない。砕け散った心がボロボロと零れているから。

彼女は、何も言わなかった。

何も言わずに、走り去った。

それが答えなんだと、思う。

どれくらい泣いていたのか。漸く落ち着いた。

自分勝手な告白と、言葉すらないその返事。解り易すぎる結末。

俺は、失恋し「ちょっと待った!!」

「純に……拓也？」

「ダメエそれでいいのか!？」

「返事も聞かずに自己完結なんて、傲慢だと思うけど？」

「早乙女に鈴木、ここは立入禁止だぞ」

「んなこたどうでもいいだろ!」

「今は、一馬が優先ですよね」

「お前ら……どうして？」

「行くぞ馬鹿一馬」

「後悔するのはまだ早いよ」

「榊原、良い友達をもったな」

「……はい」

「っし! 行くか!」

「最終決戦だね」

涙を拭い、立ち上がる。

エンディングまで泣くんじゃない!

さいい　ぐっどえんど

俺は榊原　一馬。自分勝手な告白で、大好きな人を傷付けた男だ。今は、全力で走っている。

色黒の野球馬鹿で、誰よりもお人よしの親友が先導する道をひたすらに。

相手の立場を考えない衆人監視の中での告白は、返事を聞く事すら出来なかった。

普通ならそれで諦めるべきだろう。どう考えてもこの恋は終りだろう。

でも、本当は、彼女の口から答えを聞きたい。

ここまできたら、どこまでも自分勝手に突き進んでやる！

「ここだ！」

急ブレーキをかける。純の横に滑るように停止する。疲労と緊張で高鳴る鼓動。静めようと深呼吸するけど、効果はない。

「た、体力馬鹿二人……」

しばらく待つと、口が悪い手回し上手な親友が追い付いて来た。

ぜえぜえと息を切らせて、滴る汗を拭う。それすら絵になるのは卑怯だ。

あらためて目的地に目を向ける。そこは見慣れた場所だった。

「ここ？」

「……」

いつの間にか行きつけになった定食屋。薫さん家のお店だ。

カランと乾いた音。躊躇いなく扉を開ける純。ほうけている俺を置き去りに拓也が続き、慌てて後を追う。

馴染みの空気とお馴染みの声が出迎えてくれた。

「いらっしゃいませ」

「薫さん」

いつも通りいつもの格好。いつもより、含みのある笑顔。

「それじゃ、お願いしますね」

「了解したよ。それでは奥へどうぞ」

頷き合う拓也と薫さん。通された席でしばらく待つように言われる。何故二人が知り合いなのかよくわからない。ていうか、この状況はなんなんだ？

「ま、鈍い一馬はとりあえず自分の事に専念しとけ」

純にだけは言われたくないが、今は確かに余裕がない。

出されたお冷やで喉を潤し、突っ伏す。

肉体精神両方の疲労が噴き出して、瞬く間に意識が飛んだ。

走った。走った。走った。逃げた。

私は、神崎 楓は逃げた。

荷物も持たず、ただ闇雲に走って逃げた。

自分でもどうしてなのかわからない。なにかもが突然過ぎた。

息が苦しい。胸が痛い。でも、止まらない。どうせ止まっても、止

まってくれない。

私は、卑怯だろうか？

心が振切れそうになる。

榊原君が屋上に立った時、告白を始めた時、涙が出そうだった。

向けられた『大好き』の言葉が、酷く痛かった。

私も、彼が好きだったのだ。

劇的な出会いをした訳じゃない。でも気付けば彼の姿を探すようになっていた。

勉強する姿。友達と笑い合う姿。そして、一生懸命な姿。

どろどろになっていた『特訓』も、偶然見かけてしまった。

「っ！」

足が縛れる。姉と違って私は運動が得意じゃない。背を追って走る事も、いつの間になくなってしまった。

こんなに走ったのは久しぶりだ。

汗が目に入る。流れ落ちる。少し量を増やして。

私は、応えられなかった。

好きな人に好きと言われて、片思いじゃないと知って、それでも逃げてしまった。

私は彼を好きになる理由があった。でも、彼にはあるのだろうか？

私のような人間が好かれてしまって良いのだろうか？

自分に自信が持てない。それだけの理由で逃げてしまうような私が。

「……帰ろう」

ぽつりと呟いて歩き出す。もう走る元気もない。

がむしゃらに走っていた筈なのに、自分の家に向かっていった。そんな自分がまた情けなかった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

いつものようにエプロン姿の姉が出迎えてくれる。大学生なのに。

「ふふ、随分とぼろぼろだね」

「……」

「ほら、シャワーでも浴びてきなさい」

「……はい」

ふらふらと洗面所で自分と向き合う。制服は着崩れていて、涙と汗が染みを作っている。

のろのろと服を脱ぎ、冷たいシャワーを頭からかぶるけど、ちっともすつきりなんてしない。

「楓」

「……なに？」

姉からの呼びかけ。

「ちょっと忙しくてね。あがったらホールに出てくれるかな」

ホール。我が家は小さな定食屋を経営していて、接客をする役割の事をホールと呼んでいる。

「……」

正直そんな気分じゃなかったけど、我が儘を通すだけの気力も湧かない。

ただでさえこのところ姉に甘えてばかりいたのだ。

「わかった」

お湯に変わったシャワーで全身の汗を流したら、お手伝いだ。

頭の中を切り替えるためにも、ちょうど良いのかも知れない。

お風呂をでると、下着とお店の制服が用意されていた。姉が出して来てくれたのだろう。小さく感謝して身につける。

鏡の中の私の顔はしょぼくれていたままだけど、見た目だけはちょっとましになったかな。

髪を結って深呼吸。大丈夫。今だけは忘れてしまおう。泣きながら仕事なんて出来ないから。

ぱんぱんと頬を叩いてホールにでる。お客さんの姿は疎らだ。忙しいのではなかったのかと訝しんでいると、姉が私に気付いて歩み寄ってきた。

「楓、準備はいいかな？」

なぜか嫌な予感がする。

「準備はいいかな神崎さん？」

「しっかり頼むぜ」

どうして、姉と一緒にクラスメートの男の子達がいるのだろうか。

それも、彼の……。

「楓」

「はい!？」

声が裏返る。心臓が痛いくらいになっている。

「一馬君の相手だけ、頼んだよ」

それはほほえましい光景だった。がちがちに固まった神崎さんと、寝ぼけた一馬。見ているこっちが恥ずかしくなるような、そんなやりとり。

しばらくはこれだけでからかえそう。色々と頑張ったかいがあるっでもんだよ。

「二人とも可愛いものだね」

似たような事を考えていたのか、神崎さんのお姉さん、薫さんも満足そうに頷いている。

ただ一人、純だけがなかなか話が進まないことに焦れているみたいだ。

僕としては、半年以上やきもきさせられたからいまさらって感じだけど。

そう、一馬に馬鹿な相談されてから、もう半年。とっくの昔にこの店の事も調べていたけど、ここまで来るのに相当時間がかかった。

原因は初々しい二人と、僕の隣の大学生にある。

常連と呼べる程通っている一馬と、店員である神崎さん。その二人が店の中で接触しなかったのがその証拠だ。もっとも、神崎さんの方は一馬が来ていた事を知っていた見ただけ。

閑話休題。この言葉、最近の流行りらしい。

こほん、改めて閑話休題。

高島先生の方法で告白が成功するなんて、僕は微塵も思ってなかった。衆人監視の中で告白なんて、する側も受ける側も特殊な人種じゃないと耐え切れやしない。そして、神崎さんはそういった目立つことは苦手な人だ。

だから、薫さんと接触してこの場を作ることにした。

ここまでお膳立てしたんだ。どう見てどう考えても両想いなんだから、しっかり決めろよ、一馬。

「君だけずるくないかい？」

「今まで苦労ばかりで目立たなかったんですから、いいんです」

起きたら良くわからないことになっていた。

目の前に想い人がいて、その人が普段とは違う格好をしている。素で感想を零して、あたふたとばたばたと。

とにかく、落ち着かなかった。

正面の席に座るポニーテールの神崎さん。いつも薫さんが着ているのと同じふりふりのエプロン。ちょっと釣り気味の目はゆらゆらと頼りなく揺れていて……。

気まずい。俺はさっき彼女に告白して、傷付けた。この揺れる目の原因は、俺にある。

「あの……」

どうにか会話をしようと声を出すけど、見事にぶつか。声が詰まる。けど、俺から話しだすべきだと喉を震わせた。

「ここで働いてるんだ？」

「う、うん。私の家、ここだから」

「へ、へえ。結構来るんだけど、知らなかった」

「わ、私は知ってた。たまに見かけるから」

「そ、そっか」

頭がぐるぐる。何を話せば良いのかがさっぱりわからない。

短い会話をぎくしゃくと繰り返すけど、どうにも光明が見えない。ただ心臓が煩くて、胃が上下に忙しく動いて気持ち悪い。

俺は、どうすればいいんだ？

からん。空になったグラスの中で、氷が鳴いた。

——好きな娘に迷惑かけるのは、男の特権で責任だ。

空転していた脳みそが、きっかけを手に入れて回り始める。

俺は、なんのためにここにきたんだっけ？

ゆるくなった魂を冷やす。目的は決まっていた。仕切り直した。あんな劇的なものじゃなくて、かわいらしいものでも良い。無理をしない、休みながらでもいいから、ありのまま全力でぶつかるんだ。

例え、再び砕けることになっても。

「神崎さん」

びくりと彼女の肩が震える。

「は、はい……」

消え入りそうな返事でも、返って来たことに胸が高鳴る。

「話があるんだ」

一拍の間。からからに渴いた喉。声が掠れてしまわないように注意して言葉を紡ぐ。

「いや、話というほど長いものじゃない。ただ一言、聞いてほしいんだ」

返事はない。でも、聞いてくれている。

「貴女が好きです」

さっきと全く同じ言葉。ほんの一秒足らずの言葉。思えば、この一秒のために相当遠回りしたもんだ。

「自分勝手だって分かってる。さっきは辛い思いをさせたと思う。

でも、神崎さんの言葉で、応えが欲しいんだ」

真剣に、ただただ真摯に正面を見る。

痛いくらいの沈黙。心臓はもう、破裂したんじゃないかってくらいどくどくとなっている。

「……し……」

か細い声。けれど、確かに現実にある声。

「私は、好きになってもらえるような人間じゃない」

とつとつと、それから滔々と。

「勉強が得意なわけでも、運動が得意なわけでもない。何が出来るわけでもない、ううん、なにも出来ない！ 告白されて、逃げ出すような最低な人間だよ！」

ざくざくと、叫び出される言葉が心を切り裂いていく。

染み出した透明な血が、逆に勇気をくれた。

「……でも」

その血を止めなくちゃいけない。

「俺は君が好きだ」
まず空気が固まる。

「何かが得意だから君が好きになったんじゃない」
「うそ……」

彼女の表情が固まる。

「この気持ちに嘘なんかない。嘘で好きだと言えるほど器用じゃない」

最後に、心を包む。

「気がついたら君をさがしてるんだ。気がついたら好きになってい
たんだ」

人を好きになるって、そんなものだと思う。
ゆっくりと息を吸う。

「神崎さん。神崎 楓さん」
もう一度。

「君が好きだ」
不思議と心は落ち着いている。

「返事を、神崎さんの気持ちを聞かせてください」
静寂が場に満ちる。

言いたいことは言った。伝えた。

後は、待つ。

涙でくしゃくしゃになった、大好きな人の言葉を。

「わ……たしは……」

「うん」

「好き……です。」

本当は、ずっと前から、好きだったんです」

「うそ……」

「うそじゃないよ。気がついたら、好きになってました」
全然気がつかなかった。

「でも、私なんか好きになってももらえるわけがないと思って、まし
た」

躊躇うような、一瞬の間。

「私みたいな、可愛くない、なにも出来ない駄目な子で本当にいいんですか？」

「それ以上、俺の好きな人を悪く言わないでほしい。俺は神崎さんだから好きになったんだ！」

立ち上がり、手を取る。甘い体温が伝わってくる。

再び加速しだした心臓の命じるまま、間拔けな事にまだ言っていなかったお願いを口にした。

「付き合って、下さい」

「お願い、します」

はらりと、雫が落ちた。

滲む世界の中心で、大好きな人が同じように笑っていた。

「やあーっと終わったか！」

「じ、純!？」

「おやおや、驚くような事かな？」

「お姉ちゃん!？」

「二人の世界に入りすぎだよ」

「拓也……お前まで」

「寧ろ主犯は拓也だぜ。周り見てみろ」

「「全くひやひやさせやがって」」

「「おめでとう楓ちゃん」」

「クラスのみんな!？」

「え？ ええ!？」

「本当に気付かないとは思ってなかったよ」

「う、うわああああ!」

「い、いやああああ!」

「やれやれ、逃げても仕方ないのにね」

「まあ良いんじゃないか？」

「まあいいんじゃない？ 今度は……」

走る、走る、止まる

今度こそ周りに人はいない。

今日は一日走り通しだ。へとへとになった。

繋いだ手から体温が伝わる。顔をあげたら大好きな人と目が合った。もう逸らさない。逃げたりはしない。

きゅっと、強く。

「好き、です」

唇に触れる柔らかい感触。

この手は離さないと心に決めた。

さいご ぐっどえんど（後書き）

クサッ！ クサッ！！

クッサーーーー！！

ギップ○ヤー！！

えー友達との雑談中携帯小説の話になりもう書いてしまえとなって
電車の中通学の合間で書き上げてみました

何も考えず始めてタイトルがこんなのだから

ヒロインのぽっと出感が酷かったりするけども

完結です

キャラが固まらないままでしたが

そんなもんです

何処かの誰かの一瞬の暇つぶしになれば幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8357q/>

もてる男の10の条件

2011年6月27日11時56分発行